国造り

大国主命が出雲の美保の浜にいらした時、ガガイモの実のさやの舟に乗って小さな神さまが現れました。物知りの久延美古（かかし神）のいうことには、高天原の神産巣日神の子で少名毘古那神といい、国造りの手伝いにやってきたとのこと。二神は、兄弟となって、助け合い国造りに励み、たくさんのことをしてくださいました。

山に木を植え、川に橋を架け、馬や牛を飼って田畑を耕すことを伝え、田畑を荒らす鳥・獣・害虫を防ぐ方法を教えました。また国中に温泉をひいて、人々の病を癒してくださいました。

神様を祀る時に使う酒造りにも力を発揮しました。少名毘古那神は、小さいながら、とても賢く思いやりの深い神さまでしたが、秋の刈り入れの時、粟の穂にはじかれ、常世の国へ還ってしまいました。

国造りの完成を前に、一人になってしまった大国主命は途方にくれました。すると海を照らしてやってきた神さまがおり、告げられました。『私を大和の国の青々とした山々が垣根のように連なっている東の山に祀れば、一緒に国を造りましょう。』と。こうして*御諸の山の神さまに見守られながら、大国主命は立派に国造りを終えられ、この国は栄えたのでした。

*御諸の山の神様
一般的に御諸山とは神が鎮座する山という意味。ここで言う「御諸の山」は奈良県桜井市の三輪山のことで、山を御神体とする大神神社が鎮座している。御祭神は大物主神。